
Secret De-Fencers ZERO(?)

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Secret De-Fencers ZERO(?)

【Nコード】

N87870

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

2008年6月13日、京浜大地震が発生した。地震の原因は、時間断層の崩壊。それとともにやってきたクリーチャー（化物）シノメユラナ。東雲有奈は未来人のキールに出会い、生物学の権威である有奈の父が世界を滅ぼす『バイオロイド』の研究を行っていると聞く。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであろうか。

(前書き)

この小説はフィクションです。実際の人名、地名、団体名とは関係ありません。なお、残酷な表現があります。ご理解の上、お読みください。

前>昨日、今日、そして明日もこの怠惰と慣れ合いを認め合うしかない世の中に俺はもうウンザリしていた。そして願った。

「こんな国亡くなってしまう」

まあ、思春期の少年の一瞬の間でしかない。けどさ、それが現実になってしまふことまで冷静に考えてみなよ。

見渡す限りの建物は傾き崩れ、カラスの舞う瓦礫の山だった。肉体も心も疲れ果てた人が泥水に足を突っ込み座っていた。たぶん…あいつには明日は来ない。崩れた瓦礫の下敷きになった肉片からは、もう蛆すら湧かない。ただの骨だ。同じく水中にも衣服を着た骸が沈んでいた。車もPCも携帯も…

ここは、かつて「東京^{しやま}」って呼ばれた場所らしい。旧トウキョウエリア。通称『カトレアシティ』。

…少年は体験を多く語らない。人型PC兼第一世代（改）型バイオロイドの『私』には、彼の心に巢食う闇を理解できない。人道に背く手かもしれないが、他人の記憶へ「同期」する能力で彼の記憶に接続させていただいた。そして、彼の記憶からその当時の他人の記憶に「連鎖」する能力で、ある少女に同期することに成功した。『私』を警察に訴えるのも結構だ。しかし、ヒトは過去（歴史）から学ぶことだつてできる。『私』と共に「世界崩壊のタブー」を見ないか？申し遅れたが、『私』の呼び名は『宝来瑞希^{ホウライミスキ}』だ。ふふつ、『私』の名は無用の長物かな。それでは、同期開始。

「始めに、ここでの一人称の私はただの情報プロバイダーの『ミズキ』ではなく、その当時に存在した少女「東雲有奈」シノメユウナであることを断わっておく。

序>2008年6月13日

…誰かを追い駆けているのだろう。月明かりの下、私は息を切らせながら血に濡れた日本刀を握り締め走っていた。「殺すんだ、コロスンダ」と不純な衝動が私を急き立てる。たぶん、私は嘲っている。頬の筋肉が歪みきっていた。そして、黒い影に追いついた。黒い影は壁を背に身動きがとれない。やっと…やっとこんな苦しい思いから、私は解放される。構えた日本刀の刃が月光に怪しく煌めく。

「終わりだ!!」

覚醒。私は布団の上で金縛り状態だった。ひどい寝汗が肌に纏わりつく。誰かを追い詰めて殺そうとした?しかも、嘲っていた?頬は張ってないし、わからない。ううん、知らなくていいんだ。乱れた布団をガバリと被った。まだAM2:01。

「世界が始まるのはまだ早いだろう」

よくわからない寝言とともに、私はまた浅い眠りに落ちた。

AM7:47 目覚ましが鳴ったか、鳴らないかの議論は不要だった。ただ単純にセットし忘れただけだ。異常な身体のだるさにウンザリしながら、やっとのことで布団からモソモソ這い出る。いつも私が寝坊しようが「食べなさい」と言う父は早出で、テーブルの上にその旨を書いたメモらしき殴り書きがあった。こんな時、私は冷蔵庫を漁って朝食を取るのだが、今朝は寝坊したせいで朝食抜きだ。

TVの天気予報は全国的に例年並みの雨模様とか毎日ご丁寧な傘マ
イクだ。もうこんな時間か。大学進学を目指す私は日々時間との勝
負だ。今日くらいの体調で学校を休むなんてご法度だ。何より進学
校の授業速度は、生徒
が速記人になれるくらいなもんだ。

「無理ができるのは10代の内か…」

私はため息も束の間に、慌ただしく学校に向かった。

AM11:35 英文も漢文も全く読めない散々な日だった。3校
時の数学は移動教室。朝からずっと心配してくれる級友によろやく
素直に泣きつけた。

「もう無理ば…保健室行くから」

送ってあげようとする級友を「悪いから」と断った。こんな些細な
ことで有名大学の進学を目指す級友の脚を引っ張りたくなかった。
そもそも私が体調管理できない方がダメなのだろうけど。

学校保健医様は、どこかの大学病院からの派遣とかのうわさだ。長
身で甘いマスクのため女子の人気先生なのだが、そんなミーハー共
は学校保健医様と二人きりで話すと絶望する。正直、先生は毒舌過
ぎる。

「お前もう大学落ちたな。おめでとう！もう気負う必要ない！！」

開口一発がこれ。ひどい言いようだが、確かに私は気負っていた。

微妙に救われた感じた。とりあえず体温計で熱を測ることに。38

1！！救われない…世界がぐるぐる回る。

PM1:15 「ここにはいけない！早く逃げろ！！」

頭の中に直接投げかけてくる言葉に驚いて飛び起きた。世界がまだ180°くらい回転していた。それにしても、ひどく喉が渴いた。無断で保健室を出た私はふらふらと水飲み場まで歩いた。

「うーん…私、走れない…」

寝ぼけていた目が復活。トントンと肩を叩かれる。驚いて振り返ったら、学校保健医様の指が私の頬に食い込んだ。

「いたいらす…へんへえ…」

「おい熱まだあるじゃないか。動き回る元気が有るうちに、さっさと早退して病院に行くんだな。お前の親御さんに連絡…」

父に知られるのは嫌だったので、反射的に私は叫んでしまった。

「親はこの不景気で共働きです！1人で帰れますので、先生の助けなんて要りません！！」

突然怒鳴られたら誰でも戸惑うはずだ。私には母親がないので、叫んだことはでまかせだった。先生が反論できないように、私は念押しした。

「これ以上私に関わらないで下さい！先生は不幸な死になりますよ？」

こんな洒落にならないことを生徒に言われたら、さぞ先生も辛いだ

ろうな。怒り半分のまま私は学校を後にした。鞆も傘も要らない……そんな気がした。校門を出る時に、晴れ渡る空に乾いた轟音が響いていた。飛行機だろうと気にはしなかった。

P M 1 : 5 5 奇跡的なことに財布はブレザーの中にあつた。地下鉄で帰ろうか、それともちよつと遠いJ Rを使おうか、ポーとする頭で考えた。タクシーっていう手を失念したのは恐らく熱のせいだ。フラフラ覚束ない足取りで、雨粒が光り輝く並木の下を歩く。珍しく澄み切つた青空が映る水たまりを避ける。駅公園からは野鳥の声がかくしなかつた。まあ五月蠅いよりマシか。

P M 2 : 0 0 気がつくとJ Rのホームではなく、地下鉄のホームに立つていた。火照つた身体が風を求めていて、赴くままに着いた感じだつた。昼過ぎのホームは朝の通勤時と違って静けさがあつた。電車はちよつと前駅で停車したところ、後2分か。熱はあるけど、咳はないから大丈夫だろう……安易な考えで自分自身を納得させた。また嫌な感じがやってくる。

「ここにいてはいけない！早く逃げる！！」

私は待合席を立ち上がり逃げ腰になつた。階段を遡る。やっぱり止めた方がよかつたんだ！私はこんなところで死にたくない！！私は、熱でひどい錯乱状態になつてしまつたのであるうか。

同期が解除されました。3, 2, 1……解除成功、オールグリーン。

休 - 1 > 『私』の現在は2038年冷夏。かつて「日本国」と呼ばれた国の東側、度重なる悲劇から生き残つた「北和国^{ほくわ}」。その国民が2, 500万人。そして、彼女の時間^{ユウナ}で1分後に関東平野上の都市は、ほぼ全て崩壊したことを予め断わっておきたい。ここまで

の彼女の情緒不安さは、全て「京浜地震」に結びつくことが判明した。過去の人よ、未来のタブーを解き明かす勇気がなければ引き返した方がいい。それと、過去のタブーを直視できない未来人も止めておくのを勧めする。

さて、同期開始… 3 / 2 / 1 …

PM2:01 激しい縦揺れが、地面から唸りあがってきた。私は立つことさえ厳しくなり階段の手摺りに必死で掴まった。

「やっぱり来たのね…」

不謹慎ながら私は、胸が張り裂けそうなほど興奮していた。不思議なことに朝から続いていた妙な気だるさが無くなっていた。船酔いに似た感覚を残し、第一波は去って行った。コンクリートの壁は所々剥がれ落ちていた。余程の揺れだったのだろう。身体に目立った外傷は奇跡的になく、私はほっと胸を撫で下ろした。今の私に平衡感覚はなく、手摺りを使ってよろよろと立ちあがる。その時、ホームに火の玉が突っ込んできた。

「あれ…何よ…」

すぐに気づく。あれは、私の乗るはずだった電車だと。今はブレーキと乗客の命を失い、暴走する火の玉となってホームを走り抜けて行った。煙が私の視界を消す。事態に焦る私が「逃げなきゃ」と思う一方で、状況を冷静に考察する私が「逃げるとは、いったいどこへ？」と語った。そんな中でも私の脚は地上へ動いていた。地上からパニックった肉塊共が、燻製になるために降りてくるのとぶつかって苛々した。

「お前らなんて『ハムの人』になつてしまえよ!!」

地上から傾れ込んだ難民達は、何故そこを死場に選んだのか。私は地上に出てその光景に愕然とした。

PM2:06 サイレンの爆音。荒い呼吸が震える。傾いたビルの隙間から慌ただしいが空見える。もう地上には落ち着ける場所がないのか。鼻につく血の臭いがした。乱れた服装のサラリーマンが恐怖の言葉を上ずった声で叫びながら走ってきた。

「炎の竜巻がこっちに向かつてくるぞおお!!」

私の他に呆然と立ち尽くしていた人たちが、考えるよりも恐怖で散開し始めた。「炎の竜巻」、通称『火災旋風』と呼ばれる。大正の大地震では、避難所で安堵する被災者たちを一瞬のうちに消炭にした魔物だ。空気やあらゆる燃焼物を巻き込みそいつは、勢力を増す。近づいた人間を呼吸困難にし、地獄の乾きを与え、焼き尽くす。それに、大正時代と現代は大きく違う。現代は燃料を積んだ自動車という奴らのエネルギー源が、この震災で何台立ち往生しているだろう。今は考えてもムダだ!走れ!走るんだ!!生き残りたいなら、命が燃え尽きるまで走って逃げるしかない。

PM5:12 「駅の西側はあの竜巻で消炭らしいよ!!」

話声は何故か、恐怖よりも好奇心で震えていた。

「まぢか!!南区の港が水没して、座礁したタンカーとか工場とかからの化学燃料で火の海らしいぜ!!」

そんな話どうでもいい。私の前を歩いていたその2人は、アスファ

ルトに呑み込まれ消えた。

「バーカ、足元くらい見ろよ」

塞がった地割れに私はつぶやいた。私の携帯はデイスプレーにひび割れが入ってブラックアウトしていた。寒い．．．本当に6月か、真冬の間違いではないか。放射冷却が起きたのだろう。瓦礫の地上の熱は空へ。空から代わりに灰の雪が降りてきた。どこの避難所も帰宅困難者で溢れかえっていた。この街にこんな人がいたなんて驚きだ。私は時間を尋ねた自警団の人の誘導を丁寧にした。今更ながら父の安否が気になったこともある。あの父だ、きっと生きているに違いないが、研究施設のバックアップで忙しく、私のことなんて忘れてるに違いない。私だって2度の人生の危機から生き残ったんだ。少しくらい．．．そんなことないか、あの人は．．．言葉にできない複雑な思いだけ残った。3度目の危機で私は命を失うとしても、父に確かめたいことがあった。また南へ南へと歩きだした。

PM6:35 「もう離して！離して下さい！！」

この抵抗も片言の日本語を話す彼らに対して全く意味を成さなかった。私は自分の無力さと非力さを心から呪った。「非常時」こんな訳のわからないスリルが、被災者を苦しめる道具になるなんて。彼らは服装から察するに在日軍人だった。非常時の力関係ははつきりしている．．．無駄な抵抗はやめよう．．．これ以上、私自身が肉体的にも精神的にも傷つかないように。さようなら、終りの世界。私は舌を噛んで死のうとした。残念ながら、虚ろな目に映る景色は続くことに．．．

同じ服装の大男が単身で乱入してきて、そいつらを次々に倒していった。目の前の光景が信じられない私は、即ち疑心暗鬼になった。

だって…その男は腰から銃を手に取ると、私の前で躊躇いなく、ポコポコで立ち上がれない仲間を撃ち殺した。止めと言わんばかりに、ナイフで頸を刺す。ここで何があったのか、私は初めて理解できた。恐怖の余りに声を失い身を震わせた。その男は振り返り、私の顔を感情のない表情で覗き込んだ。素っ気ない一言。

「ガスト・キール陸軍曹長」

えっと、い、言われなくてもわかりますよ。

「何もわかってないガキだな…」

鈍い色の銃口が私を向く。口封じか。私は、真顔で銃口を向ける金髪ツンツン頭の長身白人に激しい怒りを覚えた。

「今、貴方がした行為の意味くらい知っているわ！この殺し屋！！」

彼は困ったように曖昧に笑う。

「そいつを言われたらお終いだな。でも20年後の未来なら日常茶飯事かもよ？」

間なく反撃。

「だったら今すぐ私の前から消え失せなさいよ！私だって好きでこんなこと…」

私は叫びながら思い出した。突然、消えた日常の風景。焼き尽くされた世界の跡。目の前を歩いていた人たちが何でもないように消えて行く。

「うぐっ…げぼ、げぼ、げぼおお…」

手で抑えようとしても吐瀉物は止めようがなかった。彼は眉を寄せ銃を収めた。世界を受け入れられなかった私は、彼から見てラリつて見えたのかもしれない。

「オツケー、ようやくまともに戻ってきたみたいで、君は？」

唐突すぎて何を聞かれているか、私は分からなかった。答えられる範囲で応じる。

「ただの一般人。シノノメユウナ」

彼は複雑な笑みを浮かべた。何故かそれは、私を憐れむように見えた。

「そうか…予想通り。君がシノノメ教授の娘さんか」

この若い軍人が、何故私の父の知り合いか？私にとって彼が南から逃亡してきた理由なんか要らなかつた。すでに辺りは暗闇。

「本格的に、現実に酔った暴徒が出てくる時間だ」

私はさっきの今だったので、怪訝な顔をしてしまう。あれはもう御免だ。そうになると、今晚は二人きり。私は毅然と言った。

「私を父の元まで連れて行け」

彼は困ったように笑った。まるで規定事項だから仕方ないといった

表情だった。

08・06・13夜> 何処かの商社ビルの中、この大震災でも持ち堪えているらしく、壁に目立ったひび割れはない。キールは私にここで待つように言うと、何処からかお菓子、飴、携帯食品をかつぱらってきた。そして段ボールと。一介の兵士さんが、ホームレス生活のプロなんて。私は軍隊でそういった訓練を受けたのかと尋ねたら、キールから珍回答が返ってきた。

「俺がターミネーターの時代から来たから…」

ダンボールハウスの建設を進めるキールの返事は、抑揚がなく至って真面目だった。それでも、TVっ娘の私は笑えた。ろうそくの炎が揺らめく。キールは、私が初めて人並みの感情を見せたので、ほっとしたようだった。さつきから私の家のことをキールはわざと避けてくれていて、私は逆に気まずい感じがした。だから、話そう。

「私は、父がスカイネットを作っているなんて思えないわ。それに、貴方がアンドロイドなんて話が出来過ぎよ。…そんな物の例えでしよう?」

炎の先で私の顔を見つめるキール。その静かな視線に、私の心を見透かされているようだ。

「ユウナ、君は随分と大人の考え方をするなあ。言ったことの八割方、正解だ」

信じられない話だった。未来の世界では、人類の半数が「人工生命体」であること。そして、彼らは『バイオロイド（未来日本での呼称は、アンドロイド）』と呼ばれていること。エネルギー戦争（第

三次世界大戦)で多くの戦闘用バイオロイドが作られ、人間や仲間のバイオロイドを抹殺してきたこと。何より驚いたのが、バイオロイドの先駆研究者が父であり、結果としてキールの世界では「失われた超大国」が多くできてしまった事実だった。

「何それ、信じられないよ！いくら父が『生物学の権威』だからって、それはないでしょう！？そうよ…地震で父の安否もわからないの…」

私はまた疑心暗鬼に陥っていた。こんな時、キールは絶対に気休めを言わないのは、例の通りだ。逆ギレ曹長。

「誰もお前の親父さんだけが悪いって言ってねえよ！死者が拡大したのは、未来人共おれらのせいだろ！！」
『対クリーチャー用ウイルス』しかり、『時間断層』しかりだ！！！」

『未来用語』で問題を片づけるなよ！と言ってやりたかったけど、ここは堪えて尋ねた。

『対クリーチャー用ウイルス』：エネルギー戦争後、世界中にはら撒かれたバイオロイドを殺す遺伝子(生物)兵器。戦時中から人体に対する影響が問題視され、また少年兵に対する人体実験が戦後問題になっているらしい。初期型ウイルスは、人にも感染し、癌細胞のようにヒト細胞を変性させる。感染したらどうなるかは、「ゾンビ」を思い浮かべてくれ。ただし、ヒトの感染者は3〜7日後に全身から血を噴き出して絶命する。別名、クリーチャー化ウイルス。まさにヒトが作った「人類の脅威」だ。ああ、『クリーチャー』の説明は追々に。

『時間断層』：何故、時空に穴が開くか分からない。それは、未来

人が過去にタイムスリップした跡なのか、それともバイオロイドやクリーチャーの誕生で地球の生態系が乱れたからかもしれない。キールのような残念な人間やその他大きいモノが、違う時間帯まで落ちてしまつらしい。例えるなら、ヒトが落ちたら『神隠し』だ。ただし、巨大な時間断層の発生と巨大地震の因果関係は否めないらしい。時空に穴が開いて関東平野がぶつ飛んだ…傍迷惑だよ。それが地震の原因つてさ。

「ここまで手が込んだ話なら信じるしかないね…」

私は本音を口にした。キールは私のことを「物分かりの良い娘で助かるよ」と言つて、彼自身の拙い言語能力に苦笑いした。まあこの未来人は、余興を話すのがお好きのようだ。炎を見つめる目がどこか遠い。

キールは、25年前に落ちた未来人。ついでにクォーター（日系三世）で、母国語が偶然「日本語」だった。彼がこの次元にやってきて右往左往する様分かる気がして、私はくすくす笑つた。未来人は世渡り上手だ。履歴書の偽造なんてお手の物。キールがまともに軍人職なのも頷ける。

「何で軍職を選んだの？」

「ああ、この世界のどこへも逃げられるようにな。それと25年後の妹を守るためだ」

私は炎から視線を逸らす。一人っ子の孤独。横目で覗くと、キールが困った笑みを浮かべていた。シノノメ教授も驚いた余興と前売つて、キールはロウソクの火を吹き消した。わっ何するの!？ 暗闇と静寂、そして…

「ライトアップってか」

キールの手が輝き出す。よく見るとハート型を描いた指の間を静電気らしき物が延々と走り抜けている。闇の中に黄色の光。その幻想的な光景に思わずうっとりした。キールは、理系女子を何たるか心得ているようだ。

秀囲気ぶち壊しのキールの一言。

「ユウナは何か話をしてくれないのか？」

…冷めた。ごめん…無理…寝るよ。それに珍しいもの好きの研究者の私の父とキールの関係も分かった。キールは父の実験動物^{モルモット}か。現実ってそんなものだろう。静かな夜が珍しい街なので、日頃の分も寝るに限る。そうは言っても寝付きは、環境適応能力が高い未来人の方が早かった。

同期が解除されました。 3 / 2 / 1 …解除成功、オールグリーン。

休 - 2 > どうでもいい話だが、『私』は「シノノメの息子」と知り合いだ。そして『私』たちの面倒を見てくれたヒトが「ガスト・キール・トツシュ」。『私』の時間帯では、彼は行方不明扱いだった。災害時の行方不明者と変わりないだろう。

東京市内から南（川崎）の父の研究所へ向かうユウナ。そして何故か南から逃げてきたキール。若干ネタをばらすと、キールの逃亡理由は時間断層と関係があつた。今回の時間断層の発生は、川崎一帯にクリーチャーをわらわら出現させた。こいつらのせいで東京は30年間も人が住めない街になった。そしてユウナの時間帯、東京の

南ではクリーチャー共による無差別殺戮が始まっていた。二次感染した元人間とクリーチャー共との戦いは、ユウナ達が寝息を立てている間にも東京防衛線の崩壊と共に深刻化していた。考えてみても、避難所で安堵する武器を持たない被災者たちが、ともに奴らと戦えるだろうか。『私』は当時の資料しか知らないが、ユウナが遭遇した「火災旋風」以上の死者が出た事実は頷ける。「何とかしろ、この糞PC女！」とシノの字の誰かさんみたいに、『私』を罵らないでほしい。出来たら、とうに善処している。

当時の日本政府記録である。08・6・13の夜の時点で「首都圏戒厳令」は敷かれていた。政府非常事態宣言は翌日AM3:15。「首都圏強制退避令」が同日AM7:00過ぎ。いかに上の指揮系統が予期せぬ事態に脆いかを心得ていたほうがいい。まあ『クリーチャー』なんて当時の災害対策マニュアルに記載されていたか：謎だ。時に「東海沖地震」が併発したのは、首都壊滅の3日後。「富士山」という当時の日本の心と呼ばれた山の半分が、噴火で爆ぜたらしい。旧東京エリアにもそれらしき大岩がゴロゴロ転がっているので気にしていたところだ。そう見ると、政府の「首都圏強制退避令」はベストなタイミングだったのかもしれない。

おっと、余計なことをベラベラ喋ってしまったな。では、同期開始
… 3 / 2 / 1 …

京浜地震から2日目、朝> 眩しい…目覚ましはまたセットし忘れた？ 今何時だよ？ 私はここが段ボールハウスであることを思い出し、ウンザリした。二度寝しよう…

「す・る・な！このクワガタ娘！！」

痛いって、私のツイテールを引っ張るな！結構、頭皮に来るんだぞ

！！

「朝から何すんのよ！！」

カウンター猫型ロボットパンチは宙をバタバタ、キールは私の身長を小馬鹿にしつつ、私の頭を片手一本で押さえつける。い、いつまでも子供じゃないんだからね！ミニトマトみたいな私の叫び。

「おはよう、ユウナ」

あつ流したな。突っ込まれず不完全燃焼の私は、口をこもこもと挨拶を返す。ところで…

「今何時？」

携帯のディスプレイが割れてお釈迦になっていた。父に連絡が取れない原因だ…むう役立たずめ。キールは平坦な返事をした。

「朝の6：05。後55分で首都退避令が出ると思う。お前が寝坊したら独り寂しくお亡くなりコースだった」

くっ…未来人だからってスケジュール通りに事が運ぶなんて有り得ないんだからね！私は乱れた髪を一旦下ろして結び直した。またスルールのキール。唐突に思い出したことを語る。

「そうか、俺はユウナにまだ、南から逃げてきた理由を話してなかった」

私は胡散臭そうな視線を送る。

「何よ…時間断層とかいうのと戦って、逃げたんじゃなくて？」

私の冗談半分はあながち間違っただけで、良い線だったらしい。キールの例の困った笑顔の登場だ。

「そういうこと。昨日は断層から湧いてきたクリーチャー共と戦っていた。ユウナは、避難所の自衛官共のブルーな表情を拝めたか」

ブルーだったかはともかく、自警団の人も物騒な武器を持っていて、変だとは思ったけど。まずクリーチャーって何よ？害獣？それとも未来人？

「奴らとヒトを一緒にするな…俺は未来人だから、簡単に見分けがつく」

『クリーチャー』：ハチユウ類のような6つ目が、ドス紅く爛れた身体にある。そして長い爪と牙が生えていて、鈍い動きの割に超攻撃的らしい。遠目から見ると、黒い塊が地を這いずり回っているように見える。回復力がヒト以下の下等生物だが、コア（核となる目）を破壊しない限り不死身の怪物。

「感染したら、ウイルスより確実にゾンビになる」

そう言っただけでキールは、ずっしりと重みある鈍色の塊を渡してきた。これ…本物の銃でしょ。話が洒落にならないね…。私は目を白黒させた。キールは未来人らしく落着きを払って出立準備を進めている。これは戦争だ。

「そいつで敵の胴体の目ん玉^{コマ}を撃ち抜け。感染しない距離を保つことだ。ああそれと、目障りな人間がいたらぶち殺しても構わん」

「キールみたいに無駄に撃てないわよ！」

「昨日のレイパーさん方も半分クリーチャー化していたけど…」

わ…私、感染してないよね！？わたわたする私に救いの言葉。

「奴らの毒性は強いからすぐに身体に変化が出る。それに、脱がせて確かめ…」

ふんふん、それじゃ私の裸見たの？馬鹿なの？中二なの？死にたいの？最凶の笑顔で銃口をキールの額にゼロ距離セット。

「ウツホ、俺を試し撃ちにしても何の得にもならないぞおお！！そんな命懸けで見るかよ！！お前は絶対感染しない体質なんだよ！！」

絶対感染しない体質か…私は制服のそでを捲くつた。心あたりがないわけでもないけど、それを考えたら怖くなった。

「ツベルクリン反応でもあつたか？」

あつたら嬉しかったよ。あるはずない。キールは「気にするな」と珍しく慰めの言葉を掛けてくれた。「裸だったら何が悪い？（視聴者的に）」って副音声かな。そんなやりとりの後、私たちの南下作戦が始まった。

08・06・14AM6:55そしてサイレン>「クリーチャー共の恐ろしさをお前は全く分かってない」と怒鳴られた上に拳骨を食らった。「拳骨と比べられないくらい」としか実感できない私は、

まだまだ旅に出る前の可愛い子だったかもしれない。それにしても痛い…乙女に手加減無しですか。

「ねえ何で線路の上を走っているの？」

さっきの今で尋ね辛かったけど、謎を解き明かすには仕方なかった。キールはいつもの生返事に戻っていた。緊張感がないと怒られてこれですか。やれやれ。

「一般道は、乗り捨て車のせいで狭い道路だ。その上で、ゾンビと戯れたいか？」

キールは、「私がヒトは殺せないと食い下がった」のをここまで引きずっていやがった。いや、キールなりの私への配慮なのかもしれない。キールは走るのを止めて、じりじり歩き始めた。しきりに辺りを気にし出す。線路の歪みが目立ち始め、それに合わせ地盤も軟くなったようだ。足元と襲撃にご注意。そろそろ東京市と川崎の境だ。

私は、妙な不安を覚えた。

「ねえ…クリーチャーって元はヒトなの？」

「いや人型のアレを見ると、元が豚ゴリラだったように見える。まあ感染者を別と考えると、ヒトとは別生物だ。アレは実験生物の出来損ないだろう」

クリーチャーが父のした（かもしれない）バイオロイド研究の一貫で起きたのかは、聞かなくてもわかる気がした。父の研究にかける情熱は歪んでいる。私が生まれた時、母は出産時の大量出血で亡く

なっている。そんな大事な時に父の姿が病院になかった、と親戚の人から聞いた私は人知れず泣いたことがある。だからと言って、アルバムの中の父がいつも白衣であったことを私が恨むに値しない。少なくとも今の私には、父の研究の意味を問い詰める必要が、世界代表としてありそうだ。そして答え次第で、父を鉛玉で消す覚悟が今の私にあるのか。人殺しの武器が私の手に重すぎた。

線路の先が海だったのだ。海面からは、プスプスと煙が立ち上っていた。川崎市街のほとんどが水没している。

「FUCK！有り得ねえ！！」

キールが昨日闘っていた研究所までの道は、地盤沈下で水没していたのだ。カリカリと苛立つキールの姿を出会ってから初めて見た。

「まるでクリーチャーにこうなることを予測されていたみたいだわ」
キールはカロリーメイトへ八つ当たりのように噛みついた。飲料水がないので、パサパサに余計腹がたつたらしく私に押し付けてきた。こいつは、歯にくっついて嫌な食べ物ワーストだ。

「優等生85点だ！次の問題は、東央大学付属生物学研究所（第6研究所）に入る道が2つしかない。1つは水没。もう1つは地震で瓦礫に封鎖されていたはずだ」

かなり問題に不備があると思う。1つ目は、私たちと遭遇しないクリーチャー。昨日キールが遭遇したクリーチャーの移動経路を考慮するべきだ。つまり別ルートが存在。2つ目は似たり寄ったりだけど、首都の道路事情は日々進化しているってこと。

「いいえ、3つ目の道があるわ。通称『三高ルート』。最近できた裏道つてところね」

「ちよつと待て…そんな道地図になかった…ん、地図にない道か！そうかお前は三高の生徒か！でかした99点だ！！」

ああ点数は気分か。残念ながら、私は一高生だ。でも、嬉しそうに跳ねる大人の格好した子供を放置して喜ばせておこうか。それに、私はいつまでも制服で歩き回りたくないんだ。吉と出るか、凶と出るか分からないが東京へ一旦戻ることに。まるで人生ゲームのようだ。まあ、私自身がギャンブルを楽しんでいるならいいじゃないか。

東京へ戻る道中> 私たちは、初めてヒトにあった。しかし、男性はクリーチャーに右腕を噛まれたらしく、うずくまって何やら呻いていた。キールはその男の額に銃を押し付け、奴らの行方を迫った。

「わ…わからない」

「そうか、お前は残念な人間だった」

キールは今度も躊躇いなく引き金を引いた。未来人は平気でヒトを殺す。ただ、その男はクリーチャー感染が重度だったのだ。私は言葉も感情も中途半端になっていた。色々あつて免疫がついたせいか、素直に「人殺し」と罵れなくなってしまった。曖昧に表情を歪める程度。

「それだけで…」

明らかな反抗の口ではないので、キールは怒らなかつた。こんな光景に慣れてしまうと、やがて私もヒトでなしになるのだろう。AM

7:00のサイレンが鳴り響く。ヒトの世の終了を告げる合図^{おて}。

黒の番人の誕生> 被災前ここは、何のショップだったのであろうか。考える必要なく被災以前の私とは無縁そうだ。

「おおい、余り露出度の高い服は着るなよ」

キールは本気^{まじ}で変態だ。私はカーテン越しに罵った。

「五月蠅い！覗くな、ロリコン！！こんな世界になっても、カジユアルさは必要なの！！」

キールは気の抜けた返事を返した。

「結構だ」

ロリコン未来人にこだわりは無いのか。そうか、生きていれば勝ち組なんだよなあ。そんなことを考えながら、カーテンを一気に開ける。キールは有無を言わせず何かを私に被せる。

「何これ…」

私の前言撤回を要求する。キールは笑いを堪えている。

「魔法衣だ（笑）。この漆黒の衣が汝を守るだろう…ぷぷぷ」

ゲームをやり過ぎ、またはアニメの見過ぎだろ。それでもただの冗談に聞こえないのが、未来人の巧みな話術だ。何かきつと意味があるんだらうと渋々、魔法衣とやらを羽織った。黒のコートと言うよりむしろ、薄手のロングパーカー（黒）と言った方が良さだろう。

背中にでかい（白い星）模様がプリントされている。ああそうか、この店コスプレ専門店…私は、諦めて空気を読むことにした。しかし何故、実弾を売っているんだらう？（隠し扉の奥の部屋でキールが武器を手にとってニヤニヤしていた）

「裏世界へようこそ…」

「若干、怖いことを平気で言うなよ!!」

色々な世界があるものだ。それにしても、コスプレ娘って世間的に有りなのか。黒のレザーブーツを履きながら思った。まあ日常的にそういった格好をしていれば慣れるだらう。はあ…（溜息）。

未来人の趣味の店から盗人ぬすっとをしたのは先の度だ。私たちが戦利品を手てに歩いていると、最悪なことに被災民とクリーチャーの戦闘に遭遇した。

「緊張なんてしてない…」

私は頭に乗った黒いゴーグルを下ろす。バットや日本刀らしき長物を手にした自警団の人たちが、他の被災民を逃がすのに手間取っているようだ。キールが怒鳴り込んだ。

「おい！誰か、銃ライフルを持ってないのか!!」

ここは欧米じゃないぞ、と冷静に思った。自警団の人は防衛線を展開しながら答える。

「そんなもの、あなたのお仲間さん方がみんな持って行ってしまった。」

キールのレスは早い。

「そうか、おいユウナ！日本刀の親父と武器チェンジ！」

な…私に刀を振り回せと！？

「そつだ！お前テニス部だろ！？そいつは引けば切れる。敵は3体だが、お前の攻撃を期待しない。ただ、お前の機動力で敵を掻き乱せ！！」

デコイランね。私は長物を握り締めて雄叫び、6つ目の3匹に突撃した。

「うりゃああああ…！！！」

ひたすら敵の攻撃を払い、逃げる被災者から敵を離すだけに全神経を使う。昨日の火災旋風から逃げたのと比べたら、まだまだ楽だよ。キールが逃げる者と防ぐ者に的確な指示を与え、物の数分で鎮圧した。怪物共が脳漿をぶちまけて絶命していたが、緊張は緩まない。キールは負傷者の傷をライターで滅菌していた。その光景は恐ろしくて表現できないものだった。感謝、または畏怖の表情をそれぞれに浮かんでいた一行さんに、キールは何やら自衛策を怒鳴り散らしていた。

「誰かを当てにすんな！自分の身くらい自分で守れ！！あと足りない分は集団で協力して補え！！何の為の人数だ！！」

一行とは進む道が反対だったので、感謝は適当に私たちは南へ進んだ。

「あのさ、電気で痺れさせれば良かったんじゃない？」

私がじつと見つめても、キールは遠い視線で宙を見ている。ややあつて口を開いて、尤もらしい返事。

「電気は消費する…俺は過労死しちまうぜ」

能ある何とかは爪を隠す。納得した。キールはようやく私の目を見た。何かを隠すように別の話題に触れた。

「それより、ユウナはよく闘ってくれた。初陣のお礼を言っておく。そりゃ頭を撫でられると嬉しいよ。けど裏がありそつで素直に喜べない。」

「ただ走っただけだもん…」

キールは目を細めた。

「ふっ、やっぱり長刀がお似合いだ…とつさとは言え、奴の片腕を切り落とすとは…あいつと似てるよ、母さ…おっと」

やっぱり未来人の戯言か。仮に私に子供ができても刀は振らせないよ。正直、私だけを誉めてほしかった。それより…

「血糊どうしよう。下手に扱うと感染…」

「しない。お前は絶対にクリーチャーに感染しない。おめでとさん」

キールの意味深発言に小首を傾げる。そう言えば、昨日の夜もそんなこと言っていた。どうして感染者を見分けられるのだろう。いやきっと、ただの気休めに違いない。1週間の内に私は恐らく死ぬ。そんな運命、今更考えても仕方ないよね。私は重いまぶたを閉じた。

同期が解除されました。 3 / 2 / 1 : 解除成功、オールグリーン。

休 - 3 > 東雲波郎博士の娘ユウナは、日本刀（長刀）使いである。またネタバレで済まないが、父である博士と対立した彼女は、父の刺客たちへ容赦なくその刃を振るった。露出した白い肌以外、全身黒のコーディネートの彼女は「黒の番人」として後世に語り継がれている。まだまだ先が長そうだが、上の話はほぼ後談だ…済まないと思う。ソージが淹れてくれた紅茶を楽しむ暇はない…ウフフ…『私』は過去の追及が楽しくて仕方がない。

さてと、同期開始… 3 / 2 / 1 …

最後の道 > 三高は元女子高で最近共学化したばかりだ。たとえば聞こえがいいが、周りを見ずに女同士ベタベタする女を見ると第三者として腹が立つ。まあ何より研究者属性は、あいつらと相性が悪そうだ。そんな感じな訳で研究所に近い三高を敢えて選ばず、私は一高に通っていた。キールは、私の通う高校だとまだ勘違いしているようで陽気な馬鹿になっていた。

「こんな道、よく覚えているな」

「当然」

当然ヒトの気配はゼロだ。復旧作業もなく、ゴーストタウンだ。

「今度、三高の娘紹介してよ」

「あいつらが生きていたらな」

陽気なことはいいいことだが、この林道かなり危険な感じがしないか。素っ気ない返事をするのは、私のキャラじゃないだろうに。キールの表情が戻る。

「ああ奴らがうようよいるぜ」

私は専門の意見を求めた。

「突破できそう？さっきみたいに私がおとりになれないかな…」

「止めておけ…冗談が通じない相手だ。第6研まで相互に協力しながら進むしかない」

私は心配になった。父が奴らに殺されていたら目的を失ってしまう。

「それは考えるな。第6研までの道だけ考えるんだ」

私たちは怒声を上げながら、襲い来るクリーチャーを斬り殺し、撃ち崩しながら進んだ。奴らの爪と鏢迫り合いになり、弾き飛ばされそうになる。こんなのテニスのサーブにもない重さだ。私はキールと足並みが揃ってないと気づき、振り返った。珍しくキールが充填でもたついていたのが運の尽きだった。その背後からクリーチャーが忍び寄っていた。

「キール、後ろだよ！」

キールは弾込めを諦め、左手を背後に突き出した。手が千切れる音。

「ぐおっ…ユウナ、こいつを左腕ごと斬り殺せ！感染が広がらないうちに、早く！！」

私には躊躇う時間さえなかった。キールの叫びよりも、私が奴に斬り掛っていた。私はキールの左腕ごと奴の核目コアを斬り落とした。私は膝を折って泣いた。終わってしまったえば、私も女の子だ。冷静なキールは、残った右手と歯で布を巻き止血していた。未来人は状況でやることをまずやる。危機感が薄い現代日本人との違いだ。残った右手で頭を撫でられ、困惑の泣き笑いになった。

「100点だ、今は忘れる。血清がワクチンなら、きっと研究室にある」

優しいタイミングが違うよ。だから涙目だ。先を急ぐことになった。第6研究所には、いつもならば正面から入っていた。けど父の元へ度々来ていたら、裏道の存在を覚えてしまっていた。有刺鉄線を斬り壊し、敷地内へ侵入しようとした。キールは私のフードを引っ張る。敷地に空の弾倉を投げると…

ズド　　ン！！

地雷原！？私は目を疑った。

「そうかもな。たぶん他にも対侵入者用の何かがありそうだ。裏を返せばクリーチャーは研究所に侵入できていない」

「でも非常時じゃん、入れそう？」

「今頃、安心しきっていた研究者共が侵入者（俺ら）に気づいて、大慌ての逃走準備開始ってか。回線を拝借して、正面から堂々と入りますかい」

何て気楽な侵入者だろう。キールは怪しいシヨルダーバックから、これまた怪しい電子機器を片手で器用に取り出した。地面が怪しい機械のオンパレード。特に…

「これ何処のメーカーのPCよ？」

小さすぎるPCは携帯サイズ。

「ああ自作の未来型PCだ。後10年くらいで市場に出るよ。まあこの時代なら、軽くサイバーテロできる性能くらい有る。ああそいつ借りるぜ」

未来について私が考える暇はないようだ。ええと、私の携帯電話死んでるけど…

「それでも結構だ。同期機能と連鎖機能でこの研究所のセキュリティにハッキング〜」

意味はその通りらしい。どの通り？わかんない。キールは謎の回路をさくつと組立てた。

「助手のユウナにも手伝って貰おう」

俺の指示通りだから、と強引に打ち込み作業に参加。

「さよなら教授君の元へ静かに迫りくる」

テロリストの下手な歌と共に正面入り口の奪取に成功。それにしても、未来のサイバーテロって怖いね。もしかして全部計算済みかなあはは（失笑）。

終止符> いつも通りに蛍光灯の光がある。それどころか目立った被災の跡がない。研究所内に反響する私たちの靴音だけが規則正しい。それでも微かにヒトの気配がして不気味で極まりない。

「教授にあいつの製造だけは止めさせないといけない。必ずあいつは世界のバランスを崩す。あいつは俺らの手に負えるシロモノじゃねえんだ」

キールの言う「あいつ」が単にバイオロイドでないと私は直観した。たぶん未来の父の悪行は高くつくのだろう。未来人が過去の悪夢を消したいなら、私は喜んで現在を消そう。私は父を裁かなければならない。

父との再会はすぐ訪れた。残念ながら感動はいつさいない。初めて入ったが、この部屋は「ウイルス研究用」だと素人目でも分かる。

「有奈、ずいぶんと遅かったな」

いつも通りの白衣の父は、明らかに黒だ。父はキールにも労りの言葉をかける。

「曹長、御苦労だった。休みなまえ。ふむ…その左腕…感染したか」

キールは、現実には戸惑う私なんかよりも遙かに切羽詰まっていた。

キレル。

「あんたを冥土に落としてから逝こうと思ってな!!」

キールは、らしくなく直情的に引き金を引いた。弾丸は父の肩を貫通して、その身体を後ろへ崩した。父は、自分が死の危機であつても研究者だつた。苦痛よりも語る。

「素晴らしい感染体だが、後5分と持たないだろう。有奈、何故血清を彼に与えない？大事な彼が、無残に溶けるぞ!!」

父はそう吐き捨てると、這這の体で去つて行つた。何で私に話の横槍が刺さつたのだらう。当然うるたえた。

『お前は絶対にクリーチャーに感染しない』：まさか!! 血清が私の血…それが事実だつた。父が、私の身体でワクチンの研究をしていた。

「・・・」

キールが研究室の天井を見上げ、自分のこめかみに銃を突きつけ…

ダんツッ!!

私は銃を叩き落としたが、弾丸が床で暴発して私の頬をかすめる。頬を伝う血が唇を濡らす。

「25年後の妹さんに再会するまで、貴方は死ねないでしょう?」

血で濡れた唇を重ね合わせた。でも死にかけてまでキスしたくなかつた。お別れなんて認めない。その時、泣いていたのはどっちだつ

たろう。

「キールはここで休んでいるといいよ」

怒りが度を超すとヒトは作り笑える。それは私も同じ性質らしい。キールが青ざめた顔で言った。

「おれ…も行け…る…」

免疫反応が始まったらしく、身体を震わせていた。やっぱり有無を言わせない方が良かった。私は一度微笑み掛けてから、キールの溝打ちを殴った。せめてもの安息を。

私は動かないエレベーターに一瞥して、階段を駆け昇った。行く手を阻む研究員は問答無用で切り進んだ。これは正当防衛なんかじゃない…私は後先考えられないほど怒り狂っていた。

「邪魔スルナアアア！アイツヲコノ世カラ消サナキヤ駄目ナンダヨオオオ！！」

9

階を越えた屋上にヘリコプターの羽音が響いていた。屋上に着くともうヘリコプターは、離陸して私の手の届かない宙を飛んでいた。私は罵り叫びながら、キールの銃を撃ち続けた。意味のない抵抗。やがてヘリコプターは、雲間から光の差す南の空に消えた。もう私の信じるものはこの世界に何一つない。答えはどこにも…

同期が解除されました。3,2,1…解除成功、オールグリーン。

< t o b e c o n t i n u e S . D . F . Z E R O (?)

… >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8787o/>

Secret De-Fencers ZERO(?)

2010年11月22日23時34分発行